

# とりたて助詞「でも」で言い換えられない「だって」

中 西 久実子

## 〈Summary〉

I claim that '*datte* (*even*)' in Japanese has two usages; one is positive usage of '*datte*', which can be replaced by '*demo* (*even*)' and the other is negative usage of '*datte*', which cannot be replaced by '*demo* (*even*)'.

Positive usage of 'X *datte* P' presupposes that the proposition expressed does not exist, which means that connecting X to P is unexpected for the speaker. '*Datte*' means the negation of the implicated premise.

On the other hand, negative usage of '*datte*' presupposes that the proposition expressed does not exist, but the paradigmatic proposition exists. Negative usage of '*datte*', means the negation of the implicated premise.

Key Words: Focus particle, *datte* (*even*), *demo* (*even*), implicated premise, existence

## 1. は じ め に

本稿では、とりたて助詞「だって」を、肯定的用法と否定的用法に分類し、両者が「でも」で言い換えられるか否かで区別する。

肯定的用法の「だって」は、いわゆる譲歩・意外さを表す(1)(2)のような「X だって P」で、先行研究では「[X であれば P ではないだろう]という予想をくつがえす意味で用いられる (日本語記述文法研究会 (2009:117))」とされている。

- (1) ベテラン だって 負けることがあるんだ。気にしないほうがいいよ。
- (2) オムレツもいろいろ種類があって、スペイン人は、六百種類あると豪語する。しかし、六百種類はむずかしいが二、三十種類なら私たちに だって できる。子どもの頃、母はひき肉と玉ねぎのいためたのを入れオムレツを作った。(石井好子『パタをひとさじ、玉子を3コ』<sup>1)</sup>)

(1)(2)のような肯定的用法の「だって」は、「でも」とほぼ同じ意味で言い換えられる (日本語記述文法研究会 (2009))。

- (3) ベテラン {だって／でも} 負けることがあるんだ。

これに対して、否定的用法の「だって」とは、下の(4)(5)に示すようなものである。

(4) 母「どうしてこんなに成績が悪いの」

子「うるさいなあ。ほくだってがんばってるんだよ」

(5) カエルだって、生きているんだ。意味もなく殺しちゃいけない。(以上2例、日本語記述文法研究会(2009))

(4)(5)のような否定的用法の「だって」は「でも」で言い換えられない(蓮沼(1997)、日本語記述文法研究会(2009))。

(6) 「うるさいなあ。ほく {だって／\*でも} がんばってるんだよ」

## 2. 先行研究と問題のありか

先行研究では、「だって」には以下のような用法があるとされている(蓮沼(1997:206))。

(7) 譲歩：大雨だって必ず行きます。

(8) 意外：この辛さにはインド人だってびっくりした。

(9) 同類：同級生が来た。先輩だって来た。

(10) 当然：あんなことを言われれば、腹だって立つよ。(以上4例、蓮沼(1997:206))

「譲歩」「意外」は、「極限」を表す点で共通している。「極限」を表す「[X だって P]」は、「XであればPではないだろう」という予想をくつがえす意味で用いられる」とされている(日本語記述文法研究会(2009))。たしかに、上に示した(1)では「ベテランであれば、負けることはないだろう」というような予想をくつがえす意味になっている。「譲歩」「意外」を表す「だって」は「でも」で言い換えられる。本稿で肯定的用法と称するものである。

(11) 譲歩：大雨 {だって／\*でも} 必ず行きます。

(12) 意外：この辛さにはインド人 {だって／\*でも} びっくりした。

これに対して、「同類」「当然」に該当する用法は「でも」で言い換えられない。本稿で否定的用法と称するものに相当する。

(13) 同類：同級生が来た。先輩 {だって／\*でも} 来た。

(14) 当然：あんなことを言われれば、腹 {だって／\*でも} 立つよ。

「でも」で言い換えられない「だって」について日本語記述文法研究会（2009）でも(15)(16)のような例が示されており、次のように述べられている。

- (15) このような「XだってP」は、「PにXがあてはまることを強く主張するものであり、そのことを聞き手や一般の人々が認識していない場合に用いられることが多い（日本語記述文法研究会（2009））。

しかし、(15)には問題点がある。(15)は「でも」で言い換えられない「だって」だけでなく、「でも」で言い換えられる「だって」にも適用できてしまうのである。たとえば、先に示した(1)の「ベテランだって負ける」の「だって」は「でも」で言い換えられるのだが、この例でも、「ベテランが」と「負ける」が結びつくことは、聞き手や一般の人々が認識していないことであり、話し手はそのことを強く主張しようとしていると言える。つまり、先行研究だけでは2種類の「だって」の違いを明らかにしたことになっていないということである。

そこで、本稿では、(4)(5)のように「でも」で言い換えられない否定的用法の「だって」を考察の対象とし、「でも」で言い換えられる肯定的用法の「だって」との違いを明らかにする。

本稿の構成は次のとおりである。

まず、3.において、肯定的用法の「だって」の特徴を明らかにする。次に、4.で、否定的用法の「だって」は肯定的用法とは異なる前提を有していることを指摘し、否定的用法の特徴を示す。さらに、5.では、肯定的用法と否定的用法の共通点、そして、6.では肯定的用法と否定的用法の違いを示す。

なお、「だって」という形式には、とりたて助詞のほかに(16)のような引用・伝聞を表す「だって」、(17)のような接続詞の「だって」があるが、これらについては本稿の考察の対象から除外しておく。

- (16) 「どういう話？」「秋田の人が、製薬会社の懸賞に応募して、テレビが当たったんだって」「すごいね」（曾野綾子『極北の光』LBj9\_00218）

- (17) 「牛乳プリン、食べないの？」「だって、嫌いなんだもん」

### 3. 肯定的用法の「だって」の特徴

3.では、肯定的用法の「XだってP」は「表出命題が存在しない」という前提を否定して、「表出命題は存在しないのではない」ということを表しているということを主張する。

#### 3.1 肯定的用法の「だって」の前提推意

とりたて助詞というのは、「表出命題が存在しない」ということを前提に用いられる（中西

(2012:20))。「表出命題が存在しないということを前提にしている」とは、たとえば、「XだってP」で言えば、XがPと結びつくことが普通はあり得ないと話し手が思っているということである。このことを(18)に特記しておこう。

- (18) とりたて助詞というのは、「表出命題が存在しない」ということを前提に用いられる。  
「表出命題が存在しないということを前提にしている」とは、たとえば、「XだってP」で  
言えば、XがPと結びつくことが普通はあり得ないと話し手が思っているということであ  
る。

とりたて助詞「だって」というのは、「[「思っていることと違う」]というコンテキストで用いられる（中西（2003））」ものである。たとえば、(19)の話し手は、「大雨だ」と「必ず行きます」が結びつくことはあり得ないと思っており、「思っていることと違う」というコンテキストで用いられていると言える。これは「表出命題（大雨で必ず行く）は存在しない」という前提があるということでもあり、(18)に合致する。

(20)でも同様である。(20)でも表出命題（この辛さにはインド人がびっくりした）は普通はあり得ないことなので、この表出命題は普通は存在しないことが前提になっている。

- (19) 大雨だって必ず行きます。  
(20) この辛さにはインド人だってびっくりした。

(19/20)の「だって」の前提推意をまとめると、下のようになる。(19/20)の「だって」には(18)が適用されていることがわかる。

- (21) 表出命題（大雨で必ず行く）は存在しない。  
(22) 表出命題（この辛さにインド人がびっくりする）は存在しない。

### 3.2 肯定的用法の「だって」の帰結推意

「だって」は、(21/22)の「表出命題が存在しない」という前提を否定して、「表出命題は存在しないのではない」という帰結を導く。

たとえば、(19/20)の「だって」の帰結推意は(23/24)のようになる。

- (23) 表出命題（大雨で必ず行く）は存在しないのではない。  
(24) 表出命題（この辛さにインド人がびっくりする）は存在しないのではない。

肯定的用法の「だって」の特徴をまとめると、次のようになる。

- (25) 肯定的用法の「だって」は「表出命題は存在しない」ということを前提にして、その前提推意を否定するという帰結推意を導いている。

#### 4. 否定的用法の「だって」の特徴

##### 4.1 否定的用法の「だって」の前提推意

4.1 では、否定的用法は肯定的用法とは異なる前提を有していることを指摘する。

(18)で示したように、とりたて助詞というのは「表出命題が存在しない」を前提に用いられる。たとえば、(26)の「だって」では、話し手は表出命題（自分がゆでだこを食うなど残酷であること）は存在しないと思っているのだから、「表出命題は存在しない」という前提になっている。

- (26) ゆでだこになるというのはその小だこは死んだということだから、その漫画はずいぶん残酷だし、それを見て笑う人も残酷だ、と私は言った。でも夫は「自分だってゆでだこを食うじゃないか」と言った。そう言われると反論もしにくい。(平野レミ『平野レミのエプロン手帖』LBj5\_00017)

しかしながら、(26)では、パラダイグマティックな命題（小だこは死んだという漫画を描くのもそれを見て笑うのも残酷だ）は存在するという前提も存在する。パラダイグマティックとは、「系列的（paradigmatic）（仁田義雄（2004））」「範列的（益岡隆志（1991:173））」「一覧表的（奥田靖雄（1984:191））」などとされることもあり、シンタグマティック（syntagmatic, 統合的）と対立する概念である。

(27)も同様である。(27)でも、パラダイグマティックな命題（Aが泳げない）は存在するが、同時に、表出命題（自分（母親）が泳げない）は存在しない」ということも前提になっている。

- (27) 「泳げないとAちゃんが一番困るのよ」「じゃあ、おかあさんはちゃんと泳げるの?」「おかあさんは泳げないけど……」「なんだ泳げないんだ」「そんなこと、今は関係ないでしょ!」「自分だって泳げないのにさ」(中山庸子『おかあさんの夢づくりノート』PB11\_0009)

(26)(27)からわかるように、否定的用法の「だって」は「表出命題が存在しない」という前提だけでなく、「パラダイグマティックな命題が存在する」という前提も有している。この点で肯定的用法とは異なる前提を有している。このような前提を有するとりたて助詞は、(28)のとおり否定的用法になるとされている。

- (28) とりたて助詞というのは、「パラダイグマティックな命題は存在するが、表出命題は存

在しない」ということを前提にすることもある<sup>2)</sup>。これを否定的用法と呼ぶ（中西(2012:30)）。

(26/27)の「だって」にも(30)が適用できるので、(28/29)の「だって」は否定的用法だと言ってよいだろう。

#### 4.2 否定的用法の「だって」の帰結推意

4.1で指摘したとおり、否定的用法の「だって」は「パラディグマティックな命題は存在するが、表出命題は存在しない」という前提を有している。

たとえば、(27)の「だって」は、「パラディグマティックな命題（Aが泳げない）は存在するが、表出命題（自分（母親）が泳げない）は存在しない」ということを前提にしている。

「だって」は(28)のような前提の後半部分だけを否定して、「表出命題は存在しないのではない」ということを表す。これを整理すると、(29)のようになる。

(29) 前提推意：パラディグマティックな命題（Aが泳げない）は存在するが、表出命題（自分（母親）が泳げない）は存在しない。

帰結推意：パラディグマティックな命題（Aが泳げないこと）は存在するが、表出命題（母親が泳げない）が存在しないのではない。

結局のところ、(27)の話し手は、「表出命題（母親が泳げない）が存在しないのではない」のだから、「パラディグマティックな命題（Aが泳げないこと）は存在しても当然であり、非難されるべきではない」と言おうとしているのである。

否定的用法の「だって」の特徴をまとめると、次のようになる。

(30) 否定的用法の「だって」は「パラディグマティックな命題は存在するが、表出命題は存在しない」という前提を否定して、「パラディグマティックな命題は存在するのではないが、表出命題は存在しないのではない」という帰結推意を導いている。

#### 4.3 メタ言語的否定を表す否定的用法の「だって」

4.3では、否定的用法の「だって」はメタ言語的否定を表しているということを指摘する。

(31)は(29)の再掲である。ここで注目したいのは、(31)の帰結推意で否定辞「ない」が作用するのは【 】でくくった部分だけだという点である。

(31) 前提推意：パラディグマティックな命題（Aが泳げない）は存在するが、表出命題（自分（母親）が泳げない）は存在しない。

帰結推意：パラディグマティックな命題（Aが泳げないこと）は存在するが、【表出命題（母親が泳げない）が存在しない】のではない。

「だって」は話し手と聞き手に前提推意として認識されていることを否定するので、メタ言語的否定を表していることになる。メタ言語的（metalinguistic）否定とは、「すでに発した文あるいは想定していると考えられる文を対象として、それを丸ごと否定するという働きで（河西（2000:63））、「前提などのほかの局面も含めて発話を丸ごと否定の対象にするような否定である。「メタ言語的」とは、「言語を対象とする」という意味であるが、相手の発話を対象として、それにコメントする働きをもつ否定である（河西（2000:63））。そして、「想定される事態を否定するという否定（益岡（2007:38））」ともされている。メタ言語的否定は日本語では下の③2のように「[の（だ）]」や「わけ（だ）」を介在させることにより、所与の文脈において想定される事態‘P’を‘P’ということではない／P’ということを否定する」という形で表される。

③2 兄は1964年に生まれたのではない。

「だって」が表す否定は、否定辞「ない」が明示されないという点において、「のではない」による否定とは異なる。しかし、命題の存在そのものは否定していないというように前提推意を否定しているので、「だって」はメタ言語的否定を表していると言える。

## 5. 肯定的用法と否定的用法の共通点

肯定的用法の「だって」と否定的用法の「だって」は肯定述語と共起しやすいという共通点がある。

### 5.1 肯定的用法の「だって」と肯定述語との共起

すでに指摘したように、肯定的用法の「だって」というのは「表出命題が存在しない」ということを前提とするものである。したがって、そのことがわかりやすいコンテキストで用いられなければならない。たとえば、③3は、表出命題（僕に負けず嫌いなところがない）が「ない」ということを前提としており、③3の述語「なくはない」という2重否定がそのことを表している。

③3 僕はチーム競技に向いた人間とは言えない。（略）またテニスみたいな一対一の対抗スポーツもあまり好きではない。スカッシュは好きな競技だが、いざ試合となると、勝っても負けても妙に落ち着かない。格闘技も苦手だ。もちろん僕にだって負けず嫌いなところはなくはない。しかしなぜか、他人を相手に勝ったり負けたりすることには、昔から一貫してあまりこだわらなかった。（村上春樹『走るについて語るときに僕

の語ること』)

「だって」の帰結推意に「存在しないのではない」という2重否定が含まれているのは、「だって」が「表出命題がない」という前提を否定するものだからである。このように「肯定的用法」は2重否定を表すものなのだが、この2重否定が「存在する」という肯定に相当するので、「だって」は34のように肯定述語と共起することが多い。

(34) 大雨だって必ず行きます。

ただし、絶対に否定述語と共起しないわけではない。(35)のように肯定の前提(好きなコーヒーなら飲みたい)を否定することがわかるようなコンテキストがあれば、否定述語も許容される。

(35) コーヒーが好きなので、いつもは朝起きるとすぐコーヒーが飲みたくなる。しかし、今朝は腹痛で好きなコーヒー {も／でも／だって} 全然飲みたくなかった。

## 5.2 否定的用法の「だって」と肯定述語との共起

否定的用法の「だって」も肯定的用法と同様に、肯定述語と共起しやすい。「X だって P」というのは、「X が P ない」が前提になっており、その前提を否定して「X が P ないのではない」という2重否定を導くものだからである。たとえば、(36)では表出命題(自分はその頃いっぱい本出してもうけ(る))が存在しないという前提推意を否定して「表出命題は存在しないのではない」という帰結を導いているのだが、この述部「出してもうけ(る)」は「それが存在しないのではない」という2重否定の推意を伴っていると解釈しなければならない。

(36) 上野は「フェミが盛んだった時期がありましたかね。盛んになったことで何か変わりましたか?」と韜晦する。小倉は「そんな、自分だってその頃いっぱい本出してもうけ(る)てさ。挑発的にわざと言わんといて。」(勢古浩爾『ぶざまな人生』LBq1\_00014)

ただし、否定的用法の「だって」も絶対に否定述語と共起しないというわけではない。(37)のような場合はそのかぎりではない。(37)では表出命題(自分が泳げない)が存在しない」という前提を否定して、「表出命題(自分が泳げない)が存在しないのではない」という帰結推意が導かれている。つまり、表出命題が否定述語を含んでいるだけなのである。

(37)=(27) 「おかあさんは泳げないけど……」「なんだ泳げないんだ」「そんなこと、今は関係ないでしょ!」「自分だって泳げないのにさ」



## 6. 肯定的用法と否定的用法の違い

### 6.1 「も」との言い換え

肯定的用法の「だって」は「も」で言い換えられない。

(38) 大雨 {だって／\*も} 必ず行きます。

これに対して、否定的用法の「だって」は「も」で言い換えられる。

(39)のような「同類」の「だって」は、本稿の否定的用法の「だって」に相当するのだが、これは基本の「も」で言い換えられる。否定的用法では、「表出命題は存在しないが、パラディグマティックな命題は存在する」ということを前提にしているが、パラディグマティックな命題の存在は否定されないからである。たとえば、(39)では、「パラディグマティックな命題（同級生が来た）が存在する」ということを前提にしており、そのことは否定されずに「表出命題（先輩が来た）が存在しないのではない」という帰結が示されている。

(39) 同類：同級生が来た。先輩 {だって／\*でも／も} 来た。（蓮沼（1997:206））

(40)も同類の「だって」であるが、これも基本の「も」で言い換えられる。

(40) 「……私の個人的ないくつかの選択のかなめのようなところに、偶然のようにしてずっといてくれたマリア……」『ミラノ 霧の風景』の中で須賀さんは、マリアのことをこんなふう書き表している。もし私にも、マリアのような存在がいてくれたら。ふと私は考える。英語でもイタリア語でも何でもいい。さり気なく語学習得の道へと導いてくれる偶然が起きていたら。いやいや。すぐに私は否定する。須賀さんがイタリア語と出会ったのは、偶然のせいではない。その偶然をつかみ取って、逃がさないように努力したからだ。私の人生にだって、いく人ものマリアが立っていただろう。なのに努力をしなかった結果がこのありさまだ。（小川洋子『とにかく散歩しましょう』）

下に示す(41)は、蓮沼（1997:206）では「当然」、定延（1995:229）では「当たり前」を表すとされている用法である。これらの「だって」は「も」で言い換えられる。前提と同じことを述べていて「当然存在する前提をメタ的に帰結として示される」ことになるからである。(41)では、「表出命題（腹が立つ）は存在しないのではない」という帰結推意が導かれているのだが、「パラディグマティックな命題（ひどいことを言われれば、誰でも腹が立つ）が存在する」も前提推意となっているため、同じ内容の帰結がメタ的に重複して示されていることになる。

- (41) 当然：あんなことを言われれば、腹 {だって／＊でも／も} 立つよ。(蓮沼 (1997: 206))

## 6.2 名詞述語が想起させる共通認識の有無

### 6.2.1 名詞述語が共通認識を想起させる肯定的用法の「だって」

肯定的用法の「X だって P」は、「表出命題が存在しない」という前提で用いられる。「表出命題が存在しない」とは、先述したとおり、「X だって P」で言えば、X が P と結びつくことが普通はあり得ないと話し手が思っているということである。

この場合、「X だ」が普通は「P ない」という社会通念を聞き手にも想起させなければならない。たとえば、(42)の話し手は、「大雨だ」と「必ず行きます」が結びつくことは普通はあり得ないと思っているが、このとき(42)のように「大雨だ」という名詞述語が {そんなとき普通は行かない、濡れるので外出しない、催事は中止になりがちだ……} などを社会通念として想起させている。それで、後件 (必ず行きます) の結びつきがあり得ないと言うことを、聞き手も共通認識として受け取ることができる。

- (42) 大雨 {でも／だって} 必ず行きます。

(43)でも「インド人だ」という名詞述語がそれにまつわる性質 {辛いものが好きだ、辛くてもびっくりしない……} などを社会通念として想起させるので、それと後件 (びっくりした) の結びつきがあり得ないということを、聞き手が共通認識にしやすい。

- (43) この辛さにはインド人 {でも／だって} びっくりした。

(42)(43)のような肯定的用法の「だって」が「でも」で言い換えられるのは、名詞述語 (「大雨だ」「インド人だ」) が、それにまつわる性質を想起させており、聞き手が共通認識を得やすいからであろう。

### 6.2.2 名詞述語が共通認識を想起させない否定的用法の「だって」

これに対して、(44)のような否定的用法の「だって」の場合、「X だ」について普通は「P ない」という一般的性質は想起されない。たとえば、(44)では、「オマエだ」が「馴れ馴れしくないはずだ」などという一般的常識は想起されておらず、聞き手との共通認識になっていない。つまり、聞き手は「表出命題 (自分がずいぶん馴れ馴れしくなった) が存在する」ことに気づいておらず、その知識は活性化されていないということである。

- (44) 「なあに、しばらく見ないうちに随分丸くなったじゃないの」「オマエだって、ずいぶ

ん馴れ馴れしくなったぞ」(中井まれかつ『アクエリアンエイジ』Lbo9\_00217)

(45)も同様である。(45)の話し手は「カエルだ」にまつわる一般的性質(一人前の生物には見えないので命を粗末に扱われがちなカエルだ)を前提としていても、聞き手はその知識を活性化させられていない。たとえ聞いたことがあったとしてもその時点では忘れているなどである。

(45) カエルだって、生きているんだ。意味もなく殺しちゃいけない。(以上2例、日本語記述文法研究会(2009))

(45)の推意をもう少し詳しく分析してみよう。

(45)では「カエルだ」にまつわる一般的性質は聞き手に活性化されていない。そのかわり、先行するコンテキストで聞き手がカエルを意味もなく殺している(あるいは、殺そうとしている)などしているはずである。それを見た話し手は、「聞き手がカエルに命があることを忘れていることを指摘する。忘れているということが「表出命題は存在しない」という前提に相当するのだが、聞き手は、パラディグマティックな命題(生物には命があり、生きている)を社会的通念として想起させられる。「人間も生きているように、カエルも生きている」というように並列するパラディグマティックな命題の存在を想起させられたので、聞き手は「表出命題が存在しないわけではない」ということを容易に受け入れることができるようになる。このように、聞き手に「表出命題(カエルが生きていること)が存在しないのではない」を共通認識として受け入れてもらいやすくするために「だって」が用いられていると考えられる。

(44/45)のような否定的用法の「だって」が「でも」で言い換えられないのは、「オマエだ」「カエルだ」にまつわる性質が聞き手に活性化されておらず、聞き手が共通認識にできていないからである。表出命題についての共通認識がないので、話し手は以下のようにパラディグマティックな命題を利用して聞き手から共通認識が得られやすいように努力するわけである。

## 7. お わ り に

本稿では、「だって」には「でも」で言い換えられるタイプと、「でも」で言い換えられないタイプの違いを(46)のように明らかにした。

(46) 肯定的用法の「XだってP」は「表出命題が存在しない」ということを前提にしており、その「表出命題が存在しない」という前提を否定して、「表出命題は存在しないのではない」ということを表している。これに対して、否定的用法の「だって」は「パラディグマティックな命題は存在するが、表出命題は存在しない」ということを前提にしている。そして、その前提を否定して、「パラディグマティックな命題は存在するのではないが、表

出命題は存在しないのではない」ということを表している。

本稿の考察の対象はあくまでもとりたて助詞「だって」であり、引用・伝聞を表す「だって」、接続詞の「だって」については考察の対象から除外した。しかし、これらの「だって」についても、とりたて助詞の「だって」と関連があるとも考えられる。これらの「だって」ととりたて助詞の「だって」との関連については今後の考察の課題としておきたい。

### 【付記】

本稿は日本語文法学会第13回大会（2012年10月27日、名古屋大学）でおこなった研究発表の内容に加筆・修正を施したものである。会場でご助言くださった方々にこの場をお借りしてあらためて感謝申し上げます。

### 注

- 1) 本稿では例文の出典は作者、題名の順で示す。出典のないものは作例である。現代日本語書き言葉均衡コーパス（中納言）の例文は括弧内にサンプルIDを併記する。
- 2) パラディグマティックな命題とは、「類似事態（定延（1995:238）」）に相当するものである。

### 参考文献

- 奥田靖雄（1984）『ことばの研究・序説』むぎ書房。
- 河西良治（2000）「\*少ししか食べるわけではない」『言語』29-1, pp.59-64, 大修館書店。
- 河西良治（2010）「否定：対立と超越」『否定と言語理論』加藤泰彦・吉村あき子・今仁生美，開拓社。
- 工藤真由美（2000）「否定の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子（著）『時・否定と取り立て』pp.95-159, 岩波書店。
- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞 — 用法と実例 —』秀英出版。
- 定延利之（1995）「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」益岡隆志・野田尚史・沼田善子（編）『日本語の主題と取り立て』pp.227-260, くろしお出版。
- 寺村秀夫（1984）「並列的接続とその影の統括命題」『日本語学』3-8, pp.67-74, 明治書院。（寺村秀夫（1992）『寺村秀夫論文集Ⅰ — 日本語文法編 —』pp.337-347, くろしお出版に再録）
- 中西久実子（2003）「話しことばにおけるとりたて助詞「だって」の機能と意味」野田尚史（編）『現代日本語の話しことばに特有の主題・とりたて助詞に関する実証的研究』平成12年度～平成14年度科学研究費補助金基盤研究（C）（1）研究成果報告書, pp.35-44。
- 中西久実子（2012）『現代日本語のとりたて助詞と習得』ひつじ書房。
- 仁田義雄（2004）「文法とは何か」益岡隆志・仁田義雄・郡司隆男・金水敏（著）『言語の科学 5 文法』pp.4-40, 岩波書店。
- 日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法 5 第9部 とりたて・第10部 主題』くろしお出版。
- 丹羽哲也（1995）「「さえ」「でも」「だって」について」『人文研究国語・国文学』47-7, pp.25-51,

大阪市立大学文学部.

丹羽哲也 (2000) 「主題の構造と諸形式」『日本語学』臨時増刊号 19-4, pp. 100-119, 明治書院.

沼田善子 (2000) 「とりたて」, 金水敏・工藤真由美・沼田善子『時・否定と取り立て』pp. 151-216, 岩波書店.

沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房.

蓮沼昭子 (1997) 「「だって」と「でも」取り立てと接続の相関」『姫路獨協大学外国語学部紀要』10, pp. 197-217, 姫路獨協大学外国語学部.

益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版.

益岡隆志 (2000) 「例示の「でも」と従属節の確定性」『日本語文法の諸相』pp. 255-165, くろしお出版.

益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探求』くろしお出版.

森山卓郎 (1998) 「例示の副助詞「でも」と文末制約」『日本語科学』3, pp. 86-100, 国立国語研究所.

